

## 宇和島城(鶴島城, 板島城, 丸串城)

### (国重要文化財, 国史跡, 市文化財, 百名城) (宇和島市丸之内)

宇和島城(うわじまじょう)は、四国の愛媛県宇和島市丸之内にあった城である。江戸時代は宇和島藩の藩庁となった。国の史跡に指定されている。

宇和島城は、中世期にあった板島丸串城の跡に藤堂高虎によって築かれた近世城郭である。標高74メートル(80メートルとも)の丘陵とその一帯に山頂の本丸を中心に囲むように二ノ丸、その北に藤兵衛丸、西側に代右衛門丸、藤兵衛丸の北に長門丸(二ノ丸とも)を中腹に配置し、麓の北東に三ノ丸、内堀で隔てて侍屋敷が置かれた外郭を廻らせる梯郭式の平山城で、東側に海水を引き込んだ水堀、西側半分が海に接しているので「海城(水城)」でもある。

現在見られる、天守などの建築は伊達氏によるものであるが、縄張りそのものは築城の名手といわれた藤堂高虎の創建した当時の形が活用されたと見られている。五角形平面の縄張り「空角の経始(あきかくのなわ)」は四角形平面の城と錯覚させる高虎の設計で、現に幕府の隠密が江戸に送った密書には「四方の間、合わせて十四町」と、誤って記された。

高虎の発想は、城を攻める側は当然方形の縄張を予想して攻めてくる。しかし実際は五角形だから、一辺が空角になる。つまり、城を攻める側にとって、完全に死角になってしまい、攻撃は手薄になる。いわば、この一辺の空角は、敵の攻撃を避けられるとともに、敵を攻撃する出撃口ともなり得る。そればかりではない。この秘かな空角は、物資搬入口ともなり、城から落ちのびる場合の抜け道ともなる。これは守城の作戦上、効果は絶大なものといえるだろう。当時の築城術でこのようなからくりを用いた城は他にはなかった。

さらに宇和島城には本丸天守から、原生林の中を抜ける間道が数本あり、西海岸の舟小屋、北西海岸の隠し水軍の基地などに通じていた。宇和島城には「空角の経始」、間道、隠し水軍などの優れた高虎の築城術の秘法が、見事に生かされた城だったのである。

城を囲む五角形の堀は、高虎の後の大名にも代々受け継がれたが、現在は堀も海も埋め立てられている。明治以降は、大半の建物が撤去されたが天守、大手門などが残され、昭和の空襲により大手門を焼失して現在は、天守(国の重要文化財)と上り立ち門(市指定文化財)、石垣が現存する。

#### 平安時代-安土桃山時代

- 天慶4年(941年) 警固使・橘遠保が藤原純友の乱の際にこの地に砦を構えたとされる。
- 嘉禎2年(1236年) 西園寺公経が宇和島地方を勢力下に置き、砦程度の城を置く。当時は丸串城と呼ばれていた。
- 天文15年(1546年) 家藤監物が城主となる。大友氏、長宗我部氏等の侵攻に耐えた。
- 天正3年(1575年) 家藤監物が去り、西園寺宣久の居城となる。
- 天正13年(1585年) 豊臣秀吉の四国討伐により、伊予国は小早川隆景の所領となる。隆景家臣の持田右京が城代となる。
- 天正15年(1587年) 隆景は筑前国に転封となり、代わって大洲城に戸田勝隆が入城。戸田与左衛門が城代となった。
- 文禄4年(1595年) 藤堂高虎が宇和郡7万石を与えられ入城。
- 慶長元年(1596年) 高虎、大改修に着手。
- 慶長6年(1601年) 現在の姿の城が完成。宇和島城と名付けられる。高虎は関ヶ原の戦いの功により前年に国府(後の今治市)に移封となっていたが、この年、城の完成を見て国府に移った。

#### 江戸時代

- 慶長 13 年 (1608 年) 富田信高が伊勢国より転封し入城。
- 慶長 18 年 (1613 年) 信高、改易となる。宇和郡は徳川幕府直轄となる。藤堂高虎が代官となり藤堂良勝を城代とした。
- 慶長 19 年 (1614 年) 伊達政宗の長男 (庶子のため嫡子ではない) ・伊達秀宗が 10 万石で入封。
- 元和元年 (1615 年) 秀宗、入城。
- 寛文 2 年 (1662 年) 2 代藩主・宗利、老朽化した城の改修に着手。
- 寛文 11 年 (1671 年) 改修竣工。

## 天守

当初、高虎による複合式望楼型の三重天守が上がっていたが、寛文 2 年 (1662 年) から寛文 11 年 (1671 年) に伊達宗利によって行われた改修の際に修築の名目で現在の独立式層塔型 3 重 3 階に建て替えられたという。

Wikipedia による

